四八　六　財源を●　一〇九　一八　大野清瑞●　大野法●瑞
同上　八　開始●　開始●　名分の●暗い●日用工夫集●　名分に●暗い●日用工夫集●
四九　五　名分の●暗い●日用工夫集●　名分に●暗い●日用工夫集●
同上　一二　日用工夫集●　日用工夫集●
五〇　四　兎も●　兎も●角も●
同上　五　國封●　冊封●
同上　一三　外交書●　外交文書●
五一　三　私通交通●　私交通●
同上　一〇　行はれてなかつた●　行はれなかつた●
五二　一一　起章●　起章●
五三　一二　北野相公●　北山相公●
五四　九　差上げる●　差上げた●
五五　一三　受けなければ●　受けなければ●
五六　一　土藏●　土倉●
五七　一一　これ故に●　それ故に●
五九　五　詩文を作して●　詩文を代作して●
同上　一三　これに依つて以下別行に改む●●●　これに依つて以下別行に改む●●●
六〇　七　ますまい●　ますまい●
彙報

史學雜誌第貳拾參編第十二號

(通編第二百七十六號)
大正元年十二月二十日發行

論說

東胡民族考　(第十二回)

文學博士　白鳥庫吉

契丹

堕●瑰●　契丹語にては門を堕瑰といふ。その徴は遼史國語解十九に「堕瑰門名、遼有堕瑰部」とあり、又遼史拾遺十卷二に「諸史夷語曰、奚舍胡損門名堕瑰、太祖滅奚、因其門名、置爲堕瑰部」とある是なり。

さて滿洲語にては門をdukaといひ、女眞語にては之を都哈といふ。(Grube, p. 11) 契丹語の堕瑰は明かにこのdukaの對音なり。

（二）

蠆里本。契丹語にては討平を蠆里本といふ。その徴は遼史（卷十一）に「蠆里本幹魯朶穆宗置、是爲延昌宮、討平曰蠆里本」とある是なり。

さて蒙古語にては討伐を daila-khu、兵を dain といひ、又滿洲語にては討平を daila-mbi、兵を蒙古語の如く dain といふ。契丹語の蠆里本の蠆里は上の daila にて本は働詞の語尾なり。

時。契丹語にては時を時といふ。その徴は遼史拾遺（卷十四）に「燕北雜記曰、臘月戎裝飲酒、呼糌離時、糌離戰、時是時」とある是なり。

さて Tungusse 語族の中 Gold 語にては時計を báo といひ、滿洲語にては時を fon といひ、女眞語にては之を伏灣朶といふ。（Grube, Gold. Wort. p. 115, Die Sp. u. Schr. der Jurčen p. 92）契丹語の時は滿洲語の fon と同語なり。

不刺。不克。契丹語にては風を不刺或は不克といひしなり。その徴は遼史拾遺（卷十四）に「燕北雜記曰、戎主及契丹臣庶每開霹靂聲、各相釣中指、口作喫雀聲、以爲禳厭、戎主及契丹臣庶等如見旋風時、便合眼用鞭子空中打四十九下、口道坤不克七聲、漢語魂風也、以爲禳厭、又契丹國志曰、契丹人見旋風合眼用鞭望空打四十九下、口道坤不刺七聲」とあるにて知るべし。

さて蒙古語族の中 Seleginsk 語に吹雪を burgang、Nizneudinsk 語に borodolung、Khorinsk 語に borodolhon (Castren. p. 212. b) Tuukinsk 語 Aralsk 語に borodogon といふ。(Podgor. p. 19. b) 又 Turk 語族の中 Čagatai 語に旋風、暴風を buragun buraxan buran といひ、Jakut 語に暴風、吹雪を burxan といひ、Osman 語に之を boragan boran といひ、Kirgiz 語に boran、Baškir 語に buran、Wolga-Tatar 語に buran、Tobolsk-Tatar 語に buran、Kuragass 語 Koibal 語に boran、Čuwaš 語に puràn といふ。(Bernhard Munkàczi, Beiträge zu der Türkischen. pp. 45-46.) 因て案するに契丹語にて旋風を不刺或は不克といふは上の buragun の略譯にて不刺には gan を略し、不克には ra を略したるものならん。然らざれば蕪北錄に不克とあるは契丹國志に不刺とあるの誤寫なるべし。果して然りとせば、契丹語の不刺は Turk 語の boran buran の訛と知るべし。韓語にて風を pàram といふも契丹語の不刺と同語源に屬すべし。

坤。契丹語の坤不刺或は坤不克の不刺、不克に旋風の義ありとせば、坤に魂の義あるべきは、蕪北錄の譯文によりて之を推測し得べし。

さて滿洲語にては怪異を ganio といひ、(滿文彙書卷三)又蒙古語族の中 Tuukinsk Alarsk Balagansk-Nizneudinsk Khorinsk 等の諸方語に靈魂、精神を gxünegxen といふ(Pod. p. 81. u)

Castren 氏によれば、Nižneudinsk 語に之を luneheng, Kljorinsk 語 Tunkinsk 語に luneheri, Seleginsk 語に sunese(l=s) といひ(p. 213. b) 又 Tungnse 語に之を sunäsun といふ。此等の語は契丹語の坤と同語源に屬すべきが、その中にも滿洲語の genio は契丹語の坤と語形の最も相類似したるものなり。

炒伍倫　炒離　契丹語にては戰を炒伍倫或は炒離といふ。その徵は遼史（卷五十三）に「臘辰日天子率北南臣僚並戎服、戊夜坐朝作樂飲酒等、第賜甲仗羊馬、國語謂是日爲炒伍倫時、炒伍倫戰也」とあり、又遼史拾遺（卷二十四）に「臘月戎裝飲酒、呼炒離時、炒離是戰、時是時」とある是なり。

Tungnse 語族の中 Manikowsk 語に戰を čärik といひ(Castren, p. 92. b.) 又蒙古語族の中 Khalkha 語 Seleginsk 語に戰爭、兵力を tserik, Kljorinsk 語に serik, Balagansk 語 Tunkinsk 語に sërek serek といひ(Pod. p. 39. b) 又 Turk 語族の中 Sagu 語 Koibal 語に兵卒、軍隊、戰爭を serig, Radloff. Versuch. pp. 461. b, 462. a.) Osman 語に čäri, Altai 語 Telent 語に čäri, Čigatai 語 Turanči 語 Uigur 語に čärik (p. 1967) Čazi 語 Čulim 語に兵卒を zuri, Jenisei 語に ciri, Kanuezk 語に seri, Jakut 語に戰を serii といふ。(Klap. A. P. XXX VII. XXXII.) 契丹語の炒伍倫、炒離は明かに以上列記せる諸語と同語なるべきが、蒙古語にては一語の中

間にある母音を長く延くときは喉音 h, g を插入する癖あり、例へば湖水を naur, nör といふべきを nagor といひ、惡を mäu といふべきを magu といふの類即ち是なり。而して契丹語の炒離は上に擧げたる čäri, čärik, serek 等と語形の類似したるものなるが、蒙古語にては此 u, e の中間母音が長く延かるゝときは、其處に喉音 g を插入して čägori, čägorik ともいひしなるべければ、遼史の炒伍倫は正しく此語形なりと知るべし。されば契丹語の炒離は Tungnse 蒙古 Turk 三國語の何れにも比較し得べき言なれど、その一方語にまた之を炒伍倫とも呼べる例あるによりて之を考ふるに、此契丹語は蓋し蒙古語なるべし。

突厥語の古碑文に記されたる範圍に於いては軍兵を常に sü といひて、čärik の語は絶て見えざれど、此國の一方語に čärik の存せし例證あり。そは唐書（卷二百十五上）の安祿山傳に見えたる左の一節なりとす。

安祿山榮州柳城胡也、本姓康、母阿史德、爲頭居突厥中、禱子於軋犖山、廣所謂鬬戰神者、既而妊、及生有光照穹廬、野獸盡鳴、望氣者言其祥、范陽節度使張仁愿遣捷盧帳欲盡殺之、匿而免、母以神所命、遂字軋犖山、小孤、隨母嫁虜將安延偃、開元初偃攜以歸國、與將軍安道買亡、子偕來、得依其家、故道買子安節厚德偃約兩家子爲兄弟、乃冒姓安、

更名祿山。

唐の營州は今の朝陽縣にして當時奚、契丹の住地と接續したる、處なれば、柳城の胡と記されたる安祿山が奚人なるか將た契丹人なるかは不明なれど、その東胡の苗裔にして蒙古人なりしは、亦爭ふべからず。然れども安祿山の生地は突厥の領域にして、軋犖山もまた此國にありしなり。されば軋犖山を鬪戰神といふは、突厥語にして蒙古語にあらず。軋の字は通常 at と音ずれど、廣東音は Gat なれば、軋犖は當時 (at-lek とひゞき、Turk 語 Gürük の對音にして、正しく鬪戰の義なり。

宋の余靖が作れる胡語詩は契丹語を挾める漢詩なるが、中山詩話、鄭邪代醉篇、陔餘叢考に載する所、譯語に稍差異あれば、左に之を列載す。

中山詩話曰、余靖兩使契丹、虜情益親、能胡語、作胡語詩、虜主曰、卿能道我、爲卿飲、靖舉曰、夜筵設（龍）（侈盛也）臣拜洗（受賜）兩朝厥荷（通好）情感（勤）（厚重）徵臣雅魯（拜舞）祝若（統）（福祐）聖壽鐵擺（滿語高）俱可忒（極無）虜主大笑、遂爲酣飲（遼史拾遺卷二十四）

鄭邪代醉篇（卷三十五）曰、靖舉曰、夜筵設（邏）（侈盛也）臣拜洗（受賜）兩朝厥荷（通好）情幹（勤）（厚重）徵臣雅魯（拜舞）祝若（統）（福祐）聖壽鐵擺（滿語高）俱可忒（極無）

陔餘叢考（卷二十四）曰、夜筵沒（羅）（侈盛也）臣拜洗（言受賜）兩朝厥荷（言通好）情幹（勤）（言厚重也）徵臣雅魯（言拜舞）祝君（統）（聖壽鐵擺（滿語高）俱可忒（言無極）拜洗（契丹語にては受賜を拜洗といふ。さて滿洲の口語にては謝禮を baitsa-raki 或は baitsawgha といひ、(A. Rudnew. p. 13) 女眞語にては謝恩を伯亦沙埋恩といふ。(Grube. p. 97. b.) 伯亦沙埋恩の恩は漢語なれば、伯亦沙埋に感謝の義あるは確なり。さて伯亦沙埋の埋は動詞の語尾なれば、伯亦沙は語根なり。而して此伯亦沙は滿洲の口語 baitsa に比すべき言なり。思ふに契丹語の拜洗は此の baitsa (aga) 伯亦沙に當るべき言なるべし。然らざれば Balagansk 語にて感謝するを bag-ai-ha といへば、拜洗はこの語根に關係あるべし。若しも此考定に誤なしとせば、契丹語拜洗を受賜と譯したるは杜撰にして、實は感謝、謝恩の義ならん。

感勒　幹勒　中山詩話に載せたる胡語詩によれば、契丹語の感勤は厚重の義なるに、陔餘叢考には之を幹勒と書きて厚の義と說き、鄭琊代醉篇には之を亦幹勒と記して厚重の義と解したり。幹勒の勒の感勤の勤とは字形甚だ類似したれば、傳寫の際に何れかを書き誤れるなり。然れども蒙古語にては重き、重要、尊重すべきを kundu といひ、(Schmidt. p. 179. b) Balagansk 語 Tunkinsk 語にては重きを xünde といひ (Pod. p. 309. b) Dakhur 語にては xündu といひ (Iwan. p. 72. a) Yakut 語にては貴重なる

を küüdü といへば (Böhtl. p. 73) 契丹語の幹勒は、xüüdu kuudu の轉訛なるべし。l と r との融通するは、音韻上に於いて決して珍らしき事にあらざれば、必しも類例を擧げて之を證するに及ぶまじ。若しも此考定を正しとすれば、中山詩話の咸勒は咸勒の誤寫なりと斷ずべきなり。

若統　君統　中山詩話及び代醉篇に若統とあるを陰徐巽考には君統に作る。共に胡語の對音なれば、何れを正しとすべきか、之を判定するは甚だ困難なれど、これに禍祐の義ありといふによつて、原音を尊釋するを得べきか。

さて Tungus 語族の中滿洲語にては禍を hutori といひ（滿文彙書）女眞語にては忽禿兒といひ、Gruie p. 19）他の Tungus 語にては之を kutu kolu といひ。（Castren. p. 104.）蒙古語にては之を Khutuk といひ、Turk 語に kut といふ。（Radloff. p. 990. b）因て案するに契丹語若統と書けるは若統の誤寫にて蒙古語の Khutuk 或は滿洲語 hutori の對音なるべし。陰徐巽考に之を君統に作るは若統を更に誤寫せるものなり。

鐵𠸘　契丹語にては嵩高を鐵𠸘といふ。さて滿洲語にては山峯の高く突出したる形を gob といへば、契丹語の鐵𠸘はその對音なるべし。又更に此言の語源を考ふるに、蒙古語族の中 Selegiusk 語 Khorinsk 語に岡丘を dobo といひ、Turkiusk 語に dobuñ といひ (Castren. p. 198. b) 又 Turk 語族の中 Kazan 語に之を tübä, Baskir 語に tübä, Nogai 語に tepé tobä, Tobolsk 語に Kuzuezk 語に tübe, Barnin 語に tübä, Qasach 語に tepä, Osuman 語に tepé depé (Klap. A. p. XXXI) Cagatai 語に dabau といふ。(Seix Sulejman Efendi. p. 56) 此等の言は共に契丹の鐵𠸘、滿洲語の gob と語源を同じうするものにて、嵩高の義より轉じて、丘岡の名となりしものなり。

四〇裂　契丹語にては小木器を四裂といふ。その徴は遼史拾遺（卷二十四）に「四裂小木器以色綾木爲之、加黃漆」とあり、又陰徐巽考（卷十四）に「沈存中筆談載刀約使契丹戲爲詩云、押宴移離畢（如中國執政官）看房賀跋支（執衣防閤人）餧行三四裂（小木形如鼠而大、遼人以爲珍餚）密賜十貔貍（貔貍獸）」とあるにて知るべし。

さて Tungus 語族の中 Gold 語に皿を pel'é といひ、Orocen 語に p'ele pile といひ、(Grule. p. 105. b) 又 Khalkha 語に之を pile といふ。(Pal. p. 362. b) 契丹語の四裂はこの言の對音なり。

賀跋支　契丹語にては執表者を賀跋支といひしこと、前文に見えたり。

さて蒙古語族の中東蒙古語に衣服を khubtsasun (Schmidt. p. 164. c) Khalkha 語に khubtsun, Seleginsk 語に khubtsa, Tunkinsk 語 Alarsk 語 Balagansk 語に khubsagxan, Tunkiusk 語

に khulusngxun, Balagansk 語に khulusa といひ(Pod. p. 187. a) 又 Castren 氏によれば, Tunkinsk 語に之を khulsalan, Selegінsk 語に khuptéso, khupčun, Kiorinsk 語に khupsalan といひ(p. 200. b) Klaproth 氏によれば, 長城附近の蒙古語に之を golzasu, Khalkha 語に kupsjusù kupzalà, Buriat 語に kulsalan (Böt 語に kuptzuzù といふ。(A. P. p. 279) 契丹語の賀跋支の賀跋は上の khulusa khulusa と語形の最も類似せるものにて衣服の事なり。而して賀跋支の支は蒙古語の Nomina agentis, ci の對音なるべければ, 賀跋支の原音は khulusaci (khulusači) に近きものにて, 衣服を司る役人をいふ名なり。

必里遲離　契丹にては九月九日即ち重陽を心里遲離といふ。その徵は遼史（卷五十三）に「九月重九日, 天子率群臣部族射虎, 少者爲負, 謂重九宴, 射畢, 擇高地卓帳, 賜蕃漢臣僚, 飲菊花酒, 兎肝爲臠, 鹿舌爲醬, 又研茱萸酒洒門戶, 以禦禳」國語是日爲必里遲離, 九月九日也」とあるにて知るべし。契丹語にては月を賽咿唲, 日を揑離といひしこと, 後に說かんが如くなれば, 必里遲離が九月九日の直譯にあらざることは甚だ明瞭なりとす。然らばこの必里遲離は如何なる胡語の對音なるべきか。蒙古語にては虎を bars といひ, Aralsk の方語に bar といひ(Pod. p. 304. a) 又 Turk 語にては虎, 豹を bars といひ, Cagatai-Turk 語に獅子を bars といふ。(Sejs Sulejmun Efendi p. 22) 因て案するに,

契丹語必里遲離の必里遲は bars の對音にて虎の義なるべく, 而して契丹語にては揑離といへば, 必里遲離の離は揑離の略譯にて日の義なるべし。九月九日に日を揑離といへば, 必里遲離の離は揑離の略譯にて日の義なるべし。九月九日に虎を射るにより, て, 此日を虎の日と呼びしならん。然らざれば契丹語にては月を虎といふ義なるべし。

賽離といへば, 必里遲離は必里遲賽離 (bars-sara) の略譯にて虎の月といふ義なるべし。

比室　皮室　契丹語にては金剛石を比室或は皮室といふ。その徵は遼史拾遺（卷十）に「渤海亦有宿衛者, 又有左右等五比室（比音牌, 亦音椑, 比之比）契丹謂金剛爲比室, 取其堅利之名也, 漢人有控鶴等六軍, 鷄案比室即皮室御帳親軍」とあり, 又遼史（卷三十五）兵衛志御帳親軍（卷百十六）國語解の條に「皮室, 軍制有南北左右皮室及黃皮室, 皆掌精兵」とある是なり。

さて蒙古語にては金剛石を vasan といひ, Schmidt. p. 378. 之寶石を vasan といひ, Kowal. p. 1085 何れも契丹語の比室, 皮室と稍, 音聲の類似あれど, 此二語は共に外國語なれば, 之を以て契丹語に擬せんは如何にや。更に案するに, 蒙古語族の中 Khalkha 語, Tunkinsk 語 Selegінsk 語にて堅固を bösö, Khalkha 語, Tunkinsk 語に büxü, Tunkinsk 語 Alarsk 語 Khalkha 語に bexi といふ。而して蒙古, Tungise 等の北方民族の言語にては s, x, h は多く轉換するが故に, 上の büxü は büsü, bexi は besi とも訛るべく, 契

丹語の比宝、皮宝は此の besi büsü の對音にて元來は堅固の事なりしが、それより轉して金剛石の名となりしならん。

小底　契丹語にては官奴婢を小底といふ。その徴は余靖の武溪集契丹官儀の條に「十宮人呼小底、如官奴婢之屬也、巡警者呼拽剌」とある是なり。元代の蒙古語にては小厮即ち小者を薛兀薛といふ。（那珂氏成吉思汗實錄卷十二）此は契丹の小底と比較すべき言なり。又 Tungusic 語族の中 Gold 語に同輩、從者を ze といひ、同朋、隣人を zeji といひ、Olča 語に仲間、從者を ze といふ。（Grube p. 62）契丹語の小底は此等の言とも緣故あるべし。

拽剌　前條に引用せる余靖の武溪集によれば、契丹にては巡警を拽剌といふ。此拽剌の事はまた遼史卷百十六國語解の條に「算斡魯朶、算腹心、拽剌也、斡魯朶宮」とあり、又同處に「旗鼓拽剌、拽剌官名、軍制有拽剌司、此則掌旗皷者也」と見えたり。續文獻通考百五十職官考の條に「伊喇軍詳穩司（走卒謂之伊喇）」と記されたるが、此伊喇は契丹の拽剌と同語なるべし。又唐書卷二百十七下回鶻傳同羅の條に「安祿山反、劫其兵用之、號曳落河者也、曳落河者猶言健兒也」とあり。此曳落河も契丹の拽剌と同語源に屬すべく思はるゝが故に、拽剌の義も亦健兒なるべし。

此推測に從つて拽剌の原義を探らんに、蒙古語にては、男子、勇健を ere といひ、(Kowal. p. 246. b) 又 Turk 語にては夫、勇士、勇夫を er といへば、契丹語の拽剌は此二語の何れにも比較し得べけれど、契丹語には多く蒙古語を含有するに反して、Turk 語に緣故を有するもの甚だ尠ければ、拽剌は蒙古語 ere の轉訛なりと見るを穩當とすべし。Turk 語族の中 Tarantschi 語 Koman 語 Cagatai 語に男子の力、男らしき、健げなるを arlik といへば、唐書の曳落河は此 Turk 語の對音なるべし。

更に契丹語の拽剌と語源を同じうするものを Ural-altai 語族に求むるに、Magyar 語に強健、勢力を erö、強きを erös といひ、Finn 語に肥滿、強健なるを järkeä järeä といひ、(Budenz. Mag. Ugor Pssze. has. szot. p. 796 No 869) Jurak-Somoyed 語に若主、主人を jeru といひ、(Castren. p. 235) 朝鮮の現語に長者を örun といひ、百濟語に王を於羅瑕といふは、何れも拽剌と多少の緣故あるべし。

蒲速盌　契丹語にては興隆を蒲速盌といふ。其徴は遼史卷十一に「蒲速盌斡魯朶、應天皇太后置、興隆曰蒲速盌」とある是なり。滿洲語にては孳、生子孫漸多、牲畜等物孳生漸多之孳生を fuse-mbi といひ、凡物孳生的多を fusen といふ。（清文彙書卷十二）契丹語の蒲速盌は此の fusen と同語なるべし。朝鮮語にて蕃殖を pö-tšin といふも亦契丹語の

蒲速盌と語脈を同じうするものならん。(増補合上類)(Gale. p. 466. b)

窩篤盌　契丹語にては華息を篤窩盌といふ。その徴は遼史(巻一一三)營衛志の條に「窩篤盌斡魯朶興宗置、是爲延慶宮、華息曰窩篤盌」とある是なり。さて蒙古語族の中Tunkinsk 語 Aralsk 語に蕃殖するを üixe-(xu) 或は üxü といひ、Zeleginsk 語に之を üxü といふ。(Polgor. p. 311. a) 契丹語の窩篤盌は此等の言と連絡あるべし。

女古　契丹語にては金を女古といふ。其徴は遼史(巻一三)に「女古斡魯朶聖宗置、是爲興聖宮、金曰女古」とある是なり。

さて蒙古語にては金を altan といひ、Turk 語に altun といひ、滿洲語に aisin といひ、女眞語に按春といひ、何れも契丹の女古と音聲の類似する所なければ、女古は自ら此等の言と語根を異にする一語なり。既に前段に考證を經たるが如く、契丹にては今の Sira Muren 河を鳳羅簡沒里或は女古沒里と稱せり。而して鳥羅簡沒里は Saraklia Muri の對音、女古沒里は Soko Muri の音譯にて、共に黃河の義なり。されば女古本來の義は黃なれど、金の色黃なるによりて、亦その名となりしなり。高麗語にて黃を那論といひ、黃金を那論義といふも、同じ轉訛法に從へるものなり。

さて Tunguse 語族の中滿洲語にては黃を suwayan. とも、soho, sohon といひ、女眞語にて之を瓊江といひ、(Grube. p. 98) Gold 語に sogzo といひ、Olca 語に sogzo といひ、Orotsh 語に sokčo sökde sogzo といふ。(Grube. p. 94. a) 契丹語の女古は蓋し滿洲語の solo、女眞語の瓊江と最もよく類似せる形なり。

曜°°°辣°°°　契丹語にては圭を曜辣といふ。その徴は遼史拾遺(巻二十四)に「嘉祐雜志曰、契丹謂圭爲曜辣」となる是なり。

さて曜辣の二字にて譯出せられたる原語を求めんとするに方りては、先づ曜字の發音を考察する必要あり。此文字今は yao とひゞけども、當時は gio 或 duo と音せしならんか。通常也行にて響ける文字が當時佐行に音せしことは、耶律の姓が世里の名より轉せる例によりて推知し得べし。其の外後漢時代に Sugdak を粟弋(zokyok)と書き、Asoka を阿育(A-yuk)と譯せ例などによりても、也行音が佐行d行に轉ずるを悟るべし。且つまた曜の安南音が dieu なるを思へば、曜辣の二字は -Ao-la と音ずるの外に、また saola žao-la duo-la に近き發音を有せしものと察せらる。

此の如く曜辣の發音に二樣ありしを究めたる上に於いて、此契丹語の解釋を試みんか。さて蒙古語族の中 Khalkha 語に石を čoru Niżneudinsk 語 Tunkinsk 語 Khorinsk 語 Aralsk 語に sulun šulu といひ、(Pod. p. 119. a) 長城附近の蒙古語に čilaglon, Ölöt 語に

čulu (Klap. Ar. P. p. 280) Daklur 語に čolo (Iwan. p. 64) といひ、又 Tungose 語族の中 Manägir-solon 語に tsoló Butxa-Solon 語に žolo (Iwan. p. 64) Gold 語に žolo, Olča 語に žólo, Manägir 語に žolo, Oročen 語に dčolo žölo colo žolo, Wilui-Tungose 語 Udskoje 語 Bugguzin 語に žolo, Jrkut-Tungose 語に žöló Nerčinsk 語に žöllö Lamut 語に žolo, Oelozk 語に žolo, Mangsseju 語に žöllö Čapogir 語に žulo, Jenisei 語に dšöllo といふ。(Gmelin p. 65. b) 因て案するに契丹語の曜辣は žao-la, dao-la と音じ、以上列擧せる諸語と同語にて石の義なるべし。思ふに契丹語にては圭を erdeni žola(寶石)などゝ言けんを、漢人は簡を便とする習癖より、單に之を曜辣即ち žolo (石)と記せるならんか。

徐呂　契丹語にては皮を徐呂といひしが如し。その徴は演繁露に「今使此者其體例所得者韋面紅、光滑可鑑、問其名則徐呂皮也」とある是なり。

さて蒙古語にては皮、革を siri sirii といふ。(Kow. p. 1522. b) 契丹語の徐呂は之と同語にして而もその轉訛せるものならん。又 Yakut 語に皮、革を tiri といふも同じ語根に屬すべし。

十里鼻　契丹語にては奴婢を十里鼻といふ。その徴は遼史拾遺（卷二十四）に「撫北雜記曰、北界漢兒多爲契丹凌辱、罵作十里鼻、十里鼻者奴婢也」とある是なり。

さて蒙古語族の中 Khalkha 語に奴僕を zarutas といひ、Tunkinsk 語 Seleginsk 語 Barguzinsk 語に zarusi といひ、又仕へるを zarulta といふ。(Pod. p. 281. b) 契丹語の十里鼻は之と緣故あるにや。

耐　頦　契丹語にて頭首を耐といひしことは、遼史（卷十三）に「八月八日、國俗屠白犬於寢帳前七步瘞之、露其喙、後七日中秋移寢帳於其上、國語謂之揑褐耐、揑褐大（誤犬の）耐首也」とあるにて知るべし。

さて滿洲語にては首を uzu、女眞語にて兀住、他の Tungose 語にて žele dili del といひ、蒙古語にては bologi tulgai turigun türügün といひ、Turk 語にて baš といひ、何れも契丹語の耐と類似する所なければ、此言は別に一語根を爲すものなり。契丹語にては頭首を耐といふと共に頭初即ち第一を頦といひしことは大に注意すべき事なり。其徴は遼史（卷十三）に「歲時雜儀正旦國俗以糯飯和白羊髓、丸之若拳、每帳賜四十九枚、戌夜多於帳內窗中擲丸於外、數偶、動樂飲宴、數奇令、令巫十二人鳴鈴、執箭繞帳歌呼、爆鹽塊中、燒地拍鼠、謂之驚鬼、居七日乃出、國語謂正旦爲頦揑咿呪、頦正也、揑咿呪旦也」とある是なり。耐は頦と同音なるによりて之を考ふるに、此言の元義は頭なるが、それより轉じて最初、第一の義となりしならん。滿洲語にて頭をも第一をも uzu といひ

論說

東胡民族考（第十二回）

ふにて之を知るべし。

今試に此言の語源を考へんに、蒙古語にては一を nige negé negen nigen といひ、最初、第一を nige dexi といひ、(Pod. p. 205. a) 始むるを Tuukinsk 語に noilxo' Balagansk 語に noijilxo といひ、(Pod.op. 171.a) Dakhur 語に一を nege neke といひ、(Iwan. p. 67) Tunguse 語に初てを négu négut といふ。又蒙古語にて君主を noiu nojin といふは頭首の義より轉せるなるべく、契丹語の耐、廼は此等の言と緣故あるにや。

耐、廼に頭首、第一の義ありとせば、契丹國志に擧げたる古傳說中に見えたる君主の名義を解釋し得るが如し。同書契丹國初興本末の條に曰はく、

後有一主號曰廼呵、此主特一髑髏在穹廬中、視之以詐、人不得見、國有大事則殺白馬灰牛以祭、始變人形出視事、已即入穹廬復爲髑髏、因國人竊視之、失其所在、復有一主、號曰喝一作呵、載野猪頭、披猪皮居穹廬中、有事別出、退復隱入穹廬如故、後因其妻竊其猪皮、遂失其夫、莫知所如、次復一主、號曰晝里昏呵、性養羊二十口、日食十九、留其一焉

次日後有二十日、如之、是三主者皆治國之能、各徐無足稱焉。

さて此文中に見えたる廼呵、喝呵、晝里昏呵三名の末尾に附せられたる呵は一個の敬稱にて、扶餘高句麗語の加と同語なり。而して此加が汗に均しき尊稱なるに

就いては、可汗の條下に論述せり。されば廼呵は廼汗、喝呵は喝汗、晝里昏呵は晝里昏汗とも云ひ得べき名稱なり。而して廼呵の廼は耐と同語にて頭首の義なれば廼呵は即ち頭汗の意にて、此王が一髑髏なりしが故に、さる名號を得たるなり。

喝呵（一作喝呵）此王の名義に就いては確的なる明文なけれど、蒙古語族の中長城附近の蒙古語にては猪を khakai' Djungar-Ölöt 語にて gagai' Wolga-Ölöt 語にて gakhai' Tunkinsk 語 Seleginsk 語 Kluorinsk 語にて gakhai (Klap. A. P. p. 282) Niznеudinsk 語にて gakai' Tunkinsk 語 Seleginsk 語 Kluorinsk 語にて gakhai (Castren. p. 213. a) Dakhur 語にて gakha gaza gaga (Iwan. p. 70. a) といへば喝呵、喝呵の喝、喝は共に此の gakai gakha の略聲にて、此王が常に猪頭を戴き猪皮を被りしが故に、此名を得たるなり。

討。契丹語にて五を討といひしことは、遼史（卷五十三）に、五月重五日、午時採艾葉和綿著衣七、以奉天子北南臣僚各賜三事、君臣宴樂、渤海膳夫進艾艓、以五綵絲爲索纏臂、謂之合觀結、又以綵絲宛轉爲人形、簪之、謂之長命縷、國語謂是日爲討賽咿呪、討五、賽咿呪月也」とあるにて知るべし。

蒙古語族の中長城附近の蒙古語にては五を tabun' Khalkha 語にて tabu' Ölöt 語にて tabù tabun (Klop. A. P. p. 284) Dakhur 語にて tabun taágu táwan (Iwan p. 69. a) Buriat 語

にて taban tabun (Podgor. p. 256. b) といへば、契丹語の討は上の taba tawan の轉訛せるものなり。

瓜。契丹語にて百を瓜といひしことは、遼史（卷十六百）國語解の條に「六瓜、瓜百數也」遼有六百家、奚後爲院、義與五院同、二院即迭剌部折之爲二者是也」とあるにて之を知るべし。

さて Tungnse 語族の中滿洲語にて百を tanggo、女眞語にて湯古、Turk 語にて ga といひて、何れも契丹語の瓜と音聲の比すべきものなし。然れども蒙古語族の中長城附近の蒙古語にて百を zakhun zun, Khalkha 語にて zo, Olöt 語にて zo, suhu Klap. p. 254) といひ、又 Podgorbuuski 氏によれば、Khalkha 語にて之を zun, Buriat 語にて zün といひ (p. 294 b) Dakhur 語にて tsao (Iwan. p. 71 a) といへば、契丹語の瓜は瓜の誤寫にて Dakhur 語の tsao とその音の酷似せるものなり。

揑褐。契丹語にて犬を揑褐といひしことは、上に引用せる例證に見えたり。さて蒙古語族の中長城附近の蒙古語にて犬を nogai, Khalkha 語にて nokhoi, Olöt 語にて nökhöi (Klap. A. P. p. 279) Buriat 語にて nokhoj (Pod. p. 285. a) といへば、契丹語の揑褐は此言の對音なり。

賽咿呢。賽離。契丹語にては月を賽離或は賽咿呢といひしなり。その徴は遼史（卷百六十）國語解の條に「賽咿呢奢、月辰之好也」とあり、又契丹國志（卷二十七）歲時禮記中元の條に「此節爲賽離捨、漢人譯云賽離是月、捨是好、謂月好也」とあるにて知るべし。

さて蒙古語にて月を sara, saran といひ、Tunkinsk 方語、Balagansk 方語 Aralsk 方語に gxara (khara kh=x) (Pod. p. 148 a) Dakhur 語に sara, saroo (Iwan. p. 65) といへば、契丹語の賽離は正しく此の對音なり。但その一譯に賽咿呢ともあるよりて之を考ふるに契丹の一方語にては月を sain などゝいひしならん。朝鮮語にて月を tal といふは、蒙古語 sara の轉音と知るべし。

捨。奢。契丹語にて好を捨といひしは、上に引用せる遼史の文にて知るべきが、また之を奢の字にて譯したる例は、前掲契丹國志の外に、遼史（卷十三）にも見えたり。乃ち其文は左の如し。

七月十三日夜天子於宮西三十里、卓帳宿焉、前期備酒饌、翼日諸軍部落從者、皆動蕃樂飲宴、至暮乃歸行宮、謂之迎節、十五日中元動漢樂大宴、十六日昧爽復行西方、隨行諸軍部落大禮三、謂之送節、國語謂之賽咿呢奢、奢好也。

さて蒙古語族の中 Khalkha 語 Selegusk 語に好を sain, Nizneudinsk 語 Tunkinsk 語 D-

(二)

alagansk 語 Aralsk 語 Khorinsk 語に gxajn といひ(Pol. p. 323. a) Castren 氏によれば、Nizneudinsk 語 Tunkinsk 語 Khorinsk 語に haing, Seleginsk 語に saing sain といひ、(p. 196. b D-aklur 語に sen sain といひ、(Iwan. p. 72. b) 又 Tunguse 語族の中滿洲語に sain 女眞語に 塞因 といふ。(Grube p. 98. a) 元代の蒙古語にも好を sain といひしことは、元史に「太宗稱其弟拖雷曰賽因、賽因者華言大好也」とあり、又同書に「楊漢英字熙載其先太原人也、世爲播州安撫使、世祖賜名賽因不花、丘文莊正史綱云、君賜臣名將以爲榮也、譯以華言賽因好也、不花牛也、稱曰楊好牛、榮耶辱耶」とあるにて知るべし。因て案ずるに契丹語の捨、奢は上の sain と同語なるべし。Tungese 語及蒙古語にては一語の末尾に n 音を附するも否らざるも殆ど無機的のものにて、語根に何等の變化を與ふるものにあらず。例へば七を nada ともいひ、月を sara ともいふの類即ち是なり。されば蒙古語の sain の末音 n が省略せられたるときは、それは正しく契丹語の捨、奢と同じき語形となるべし。朝鮮語にて好をさといふは、また奢(22)の轉訛なるべし。

何骨朶　契丹語にては天子を提認するを何骨朶といふ。その徴の遼史拾遺(卷十五)に見えたるもの左の如し。

燕北錄曰、清寧四年戊戌歲十月二十三日、戎主一行起離轄何、往西北舘二百七十餘里、地名永興甸、行柴冊之禮、於十一月一日、先到小禁圍宿泊、於二日先於契丹宮內、選擇九人與戎主身材一般大小者、各賜戎主所著衣服一套令結束、九人假作戎主、不許別人覺知、於當夜子時、與戎主共十八相離、出小禁圍、入大禁圍、分投各一帳、每帳只有蠟燭一條椅子一隻、並無一人、於三日辰時、每帳前有契丹官僚一員、各自入帳列何骨朶(漢語天子也)提認(戎主親弟)若提認得戎主者、宣賜牛羊駝馬各一千、當日宋國大王於第八帳內提認戎主、番儀須得言道我不是的皇帝、其宋國大王卻言道儞的是皇帝、如此往來、番語三徧、戎主方始言道是便是。

さて此文に見えたる何骨朶三字は契丹の一語にあらずして二語なるべし。何骨の二字は可汗(Kagan-Khaglan)の複數 Khaghat の對音なりと思はるれば、朶の一字に提認の意義あるべし。蒙古語にては視る、認る、觀察するを khara-(klu)といひ、Baragansk 語 Tunkinsk 語に xara-xa といひ、(Kowal. p. 831. a, Pod. p. 61 b) 邏卒、巡警を kharaglul といひ、(Kowul. p. 832. b) といひ、又滿洲に瞭望を karun といひ、(Grube. p. 129 b) 女眞語に哨探を哈喇安といひ、(Grube. p. 92. b) 又 Turk 語族の中 Uigur 語に目、視を karak, Cagatai 語に見る、求るを kara-(mak), Altai 語に見るを kam, Yakut 語 kara, Kirgiz 語に目を

kaus Cuvaš 語に求むる、眺むるを kora (Vamb. p. 78 No. 83) といふ。因て案ずるに契丹語にて提認の意義あるべしと思はるゝ觸 (khlat=Klar) は以上列擧せる諸語と同語にて kara khara の對音なるべし。此の解釋にして幸に正鵠を得たりとせば契丹語何骨觸は蒙古語 khaghat khara の對音なりと斷ずべし。

郭。。离　契丹語にては沙袋を郭离といへり。その徴は遼史拾遺卷十五に「燕北錄曰沙袋番呼郭离以牛皮爽縫如鞍、底內盛沙半升、柄以木作、胎亦用牛皮裹、約長二尺」とある是なり。

さて Tungus 語にては沙土を kair といひ (Cast. p. 78. b) 蒙古語にて沙礫を khair といひ、Bulgarisk 語に沙土を xar といひ (Kowal. p. 711. b, Pod. p. 209 a) Turk 語族の中 Čuvaš 語に沙土を khyer といへば (Klap. A. XXV) 契丹語の郭离は khair の對音にて、單に沙土の義なるべきが、契丹にては沙袋をかくいひしなるべし。

易。。术　契丹語にて鐵を易术といひしことは遼史卷十三に「易术部初取諸宮及橫帳大族奴隸置易术石烈、易术鐵也」とあり、又同書卷六十に「坑治則白太祖始併室韋、其地產銅鐵、金銀、其人善作銅鐵器、又有易术部者多鐵、易术國語鐵也」とあるにて之を知るべし。

さて Daklur 語にて鐵を kuró といふは、正しく契丹語の易术と同語なり。(Iwan. p.

30) 又唐書卷二百十七回鶻傳黠戛斯の條に「有金鐵錫、每雨俗必得鐵、號迴沙、爲兵、絕犀利、常以輸突厥」とあれば、黠戛斯即ち Kirgiiz にては鐵を迴沙といひしを知るべく、而して Turk 語にては demur temur といひ、滿洲語にては sele、女眞語にては塞勒といひ、何れも契丹の易求と比すべきものにあらず。然るに Samoyed 語の中 Tomsk 方語にては鐵を kose、Ket 方語 Tym 方語 Narym 方語に kuos、Karassen 方語に kuése といひ、(Klap. A. P. VII) Ostjak 語に kues (Cst. p. 214.a) といふは黠戛斯語の迴沙、契丹語の易求、Daklur 語の kasó と緣あるにや。

匣。。列　契丹語にては復來を匣列といふ。その徴は遼史卷七十四韓延徽の傳に「(王)德明問所適、延徽曰、吾將復走契丹、德不以爲然、延徽笑曰、彼失我、如失左右手、其見我必喜、既至、太祖問故、延徽曰、忘親非孝、棄君非忠、臣雖身逃、臣心在陛下、臣是以復來上大悅、賜名匣列、遼言復來也」とある是なり。

さて蒙古文語にては復る、故郷などに還るを khari-(Klu) といひ (Kowal. p. 837 b) Buraguask 語 Tunkinsk 語に xar-klu といふ。(Ppl p. 36. a) 契丹語の匣列は明かに此言の對音なり。

國阿輦　契丹語にては收國を國阿輦といふ。その徽は遼史卷三十一に「國阿輦斡魯朶、太祖置、收國曰國阿輦」とあり、又同書卷百十六に「國阿輦收國也」とあるにて知るべし。

さて蒙古語にては、總じて取るを ab-(khu)といへど、Khalkha 語にては强て取るを khügêren ab-khu といへば、契丹語の國阿輦は此 khügêren の對音なるべし。(Pod. p. 30. a) 然らざれば滿洲語にては國を gurun といひ、女眞語にて國倫爾といひ、(Grube, p. 2) Gold 語に人民を gurún といへば、(Grube, p. 37 a) 契丹語の國阿輦は此の gurún の音譯にて國の義なるべし。然らざれば滿洲語にて取るを ali-mbi といへば、國阿輦の國は漢語或は gurun の略譯にて、阿輦は alin(alimbi の名詞)の對音なるべし。

柳。里。　皆。里。　契丹語にては請を柳里ともいふ。その徽は遼史卷五十三に「二月一日爲中和節、國舅族蕭氏請宴、以延國族耶律氏、歲以爲常、國語是日爲柳里柯柳里請也、柯時也、柳讀若留、柯讀若頗」、六月十有八日國俗耶律氏設宴以延國舅族蕭氏、亦之柳里柯」とあり、又遼史拾遺卷二十三に「燕北雜記曰二月一日番中蕭姓請耶律者本家筵席、番中呼此節爲皆里柯、六月十八日耶律姓請蕭姓者、亦名皆里柯」とある是なり。

さて Tungusse 語族の中 Gold 語にては請ふ、乞ふ、願ふ、求むるを gulgin gulinda galindi といひ、Orocen 語に kali-kka といひ、又 Gold 語に必要するを goli galî Olča 語に galî Orocen 語に kali といひ、又 Orocen 語に求むるを galaktyi 必要なるを galî Wilui-Tungusse 語に galâktaŋam, Ochozk 語に galerem, Untertunguska 語に galâktaŋam, Kondogir-Tungusse 語に golâkterin aladiam, Ochozk 語に galerem, Tungusse 語に請ふを gälam, Middendorff 氏によれば、要むるをといひ、gästren 氏によれば、Tungusse 語に請ふを gälam, Middendorff 氏によれば、要むるを galâktaŋam, gölörop といふ。(Grube p. 32. b) 思ふに契丹語の柳里、皆里は上の galî の對音なり。蒙古語に請ふ、願ふを gui-(khu), guyu-(khu) といひ (Kowal. p. 1015. b) Dakhur 語に請ふを goi-(bei), gui (bei) といふも (Iwan. p. 53. a) 契丹語柳里と緣あるべし。

（未完）

印度に於ける聖トマス布教傳說の東西交通史上に及ぼせる影響

文學士　時野谷常三郎

緒言　何等史學的價値無き傳說にして、國民思想の發展に大いなる感化を及ぼし、世道人心に少なからざる影響を止め、文化史上に看過すべからざる史實を止むるに至りし者、東西の史乘其の例證に乏しからず、瑞西に於けるウィルヘルム・テルの

論說